

茶道、振り返れば50年 その2

— 鵬雲斎玄室大宗匠の百寿を記念して —

| キラメキテラス ヘルスケアホスピタル |

粟 博志



【図 18】横山大観画「千与四郎（利休）」部分、1918 大観の称揚がみてとれる

はじめに

私の記憶が正しければ、私が千利休の名を初めて知ったのは、60年以上前の小学生の時に、展覧会でこの有名な大観の画を観た時であろう（図 18）。

2022（令和 4）年は、千利休居士（1522～1591 年、大永 2～天正 19 年）の生誕 5 百年に当る、記念すべき年であった。

一方、利休居士から数えて 15 代、前裏千家茶道家元、現鵬雲斎玄室大宗匠は、2023（令和 5）年 4 月 19 日を以って、百歳を迎えた。この上ない慶事である（図 19）。

1191 年、栄より帰朝した臨済宗（禪宗の一派）の開祖・栄西が筑前背振山と、肥前

平戸に、持ち帰った茶を植え、廃えていた喫茶を再び日本に伝えた。

1207 年、明惠は、栄西より贈られた茶を、とがの お梅尾の高山寺に移植した。

1211 年、栄西は「喫茶養生記」を著し、更に 1214 年には、鎌倉幕府第 3 代将軍・源実朝に、この著作と一盞さんの茶を献じた。抹茶の法が、正史「吾妻鏡」に登場した初めての記載であり、「茶は末代養生の仙薬なり、人倫延齡の妙術なり」と、茶を長寿の薬と考え、医学的効能を説いている。

・村田珠光（1422, 23～1502 年）は、能阿弥に学んだ。彼は足利義政の指南役であった。

珠光は、「月も雲まのなきは いやにて候」からものと言うように、高価な唐物道具のみならず、



【図19】ヨハネ・パウロ2世と謁見する鵬雲斎御夫妻、1984（裏千家今日庵歴代、淡交社より引用）

粗相な珠光茶碗や和物道具も導入した。

「ひゑかる」「ひへやせ」たる境地、即ち「冷え枯れた」枯淡の境地こそ重要と考え、30歳頃に禪僧になり、大徳寺の一休宗純に参禪し、「茶禪一味」の境地を見い出したと伝えられる。

その茶室は、書院風の一間床を有する四畳半で、台子を据えていた。

・武野紹鷗（1502～1555年）は、戦国時代の堺の豪商の家に生まれ、連歌の大家、三条西実隆に和歌はもとより、古典も学んだ。

茶は、珠光の弟子の宗珠らに学んだと言われる。

彼の茶室も、一間床を有する四畳半本勝手であった。

茶道具は唐物であったが、初めて掛け物に和物（藤原定家の色紙）を用いたという。

・千利休（宗易）は自由都市・堺に生まれた。堺の豪商「堺衆（以前は会合衆）」の一人で、北向道陳や武野紹鷗に茶を学び、大徳寺の大林宗套、吉溪宗陳らに参禪した。

1569（永禄12）年、堺が織田信長に支配されると、堺の豪商茶人である今井宗久、津田宗及と共に信長の茶頭として仕えた。彼らは、天下三宗匠と称された。

（付録）信長は、1574（天正2）年に正倉院の天下の名香木「蘭奢待」らんじやたいを規定通り、1寸八分切りとる。

これを切り採る事は、日本史上に於る最高権力者の証であった。

この香木は、長さ約150cm、重さ約12kgで、香木としては巨大である。

歴史上、香木を切りとった事が確認されているのは、足利義満、義政、義教、織田信長、明治天皇など数名のみで、義政、信長、明治天皇の切り跡が、張紙で知られる。

信長が切除した香木の一包を、利休と宗及の2人だけが拝領している。

1582（天正10）年の本能寺の変による信長の自刃後は、豊臣秀吉に仕える。

（付録）利休の時代の薩摩藩

・1585（天正13）年、秀吉は関白に叙任。

・1586（天正14）年、秀吉は、禁中にて

黄金の茶室による茶会を催す。太政大臣に叙任される。

この1586年に、薩摩は九州の制圧を目指していた。

島津の外圧を受けた豊後（大分県）の大友宗麟は、秀吉に援軍要請のため大阪城を訪れたが、その際、秀吉の弟・豊臣秀長と面会した。その時の事を、「内々の儀は宗易（利休）、公儀の事は宰相（秀長）存じ候……（大友家文書録）」と記している。利休の当時の影響力が窺い知れる。

秀吉は停戦を命令（九州停戦令）したが、当主・島津義久は、源頼朝以来の名門島津が、成り上りの関白の言いなりにはならぬ、と拒否した。

これに対し、1587（天正15）年、秀吉は30万人分の兵糧米、馬2万頭分の飼料の1年分を調達し、20万人以上の大軍で、九州征伐（島津攻め）を開始した。これを見ても、戦争には、綿密な作戦計画、軍隊の軍備、移動、施設、食料などの後方支援である兵站の重要性が分る（ナポレオンの冬将軍による悲惨な敗戦が思い出される。彼は、調子に乗り過ぎ、戦争のいろは、を忘れ、戦わずして大敗を喫したのである）。

圧倒的兵力で秀吉軍は、薩摩まで侵攻してきた。4月28日の川内・平佐城での戦闘が最後の戦いとなった。

大言を吐いていた義久も、秀吉の圧倒的兵力を前に悟った。彼の偉い所は、敗北を認めた事である（図20）。

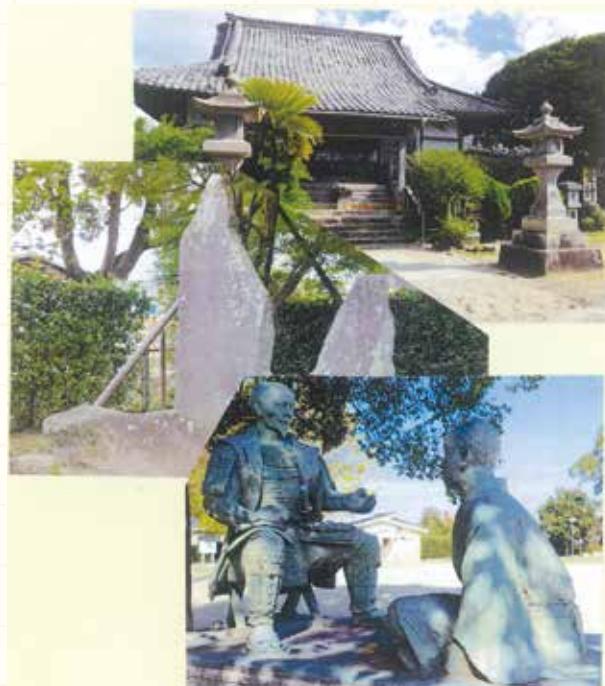
5月3日、秀吉自身が川内川河口付近の泰平寺に本陣を置いた。義久は、母の菩提寺・伊集院の雲窓院で剃髪・得度し僧体となり、5月8日、泰平寺で恭順の意を表し、謁し許しを請い降服し、赦免された。

その後も抵抗していた、義弘（鬼島津）も5月22日降服。彼は関ヶ原の戦いで敵陣を中央突破して帰還した人物である。

義久は最後まで抵抗。秀吉が泰平寺から大口に移動中、祁答院で家臣に、秀吉の（空）駕籠に6本の矢を射させた。彼は朝鮮出兵にも出陣せずに自刃に追い込まれた。

薩摩の郷中教育の5つの年中行事で、歳久は「心岳寺詣り」、義弘は「妙円寺詣り」として、現代に伝えられている。

川内市の泰平寺跡には、当時の和睦石と、秀吉の像があり（図20）、伊集院の雪窓院には、義久公剃髪石が残されている。



【図20】豊臣秀吉と島津義久、1587

上：川内市泰平寺

中：秀吉の作った和睦石

下：秀吉と義久

（ふるさと薩摩川内、泰平寺より）

鹿児島県民でも、この時代の事を知らない人もいると思われ、敢えて書き記した。

この1587（天正15）年9月には、聚楽第が完成、更に10月には、北野天満宮で大茶会が催された。

然し、そのわずか4年後、1591（天正19）年、利休は、聚楽第屋敷にて自刃。70歳であった。秀吉は、1598（慶長3）年死去。62歳。

利休居士は、茶の湯の草体化に努め、「躰口」「室床」を備えた二畳半の草庵茶室を創作した他、樂茶碗、竹製の花入、蓋置、中節の竹茶杓などを創作し定着させ、更には、在世中の禪僧の墨跡を床に掛けるなど、禪の精神を一層重んじた。（茶禪一味）

「わび茶」の確立である。



【図 21】夕陽の照月庵にて、1993

利休居士の確立した茶道は、四百数十年後の現在まで、その本質を変える事なく守り伝えられている。

千家流茶道は、第3代宗旦の後、表、裏、武者小路の三千家に分れた。鹿児島大学医学部茶道部は、指導者・中村宗照先生が学んでいた、裏千家流茶道であり、前15代家元が現・鵬雲斎玄室大宗匠であり、現在は、坐忘斎宗室家元が第16代である。

以下、敬称・敬語は省略させていただく。

[4] 百歳を迎えた 鵬雲斎玄室大宗匠

大宗匠は、令和5年4月19日に百寿を迎えた。誠に喜ばしい限りである。

中村宗照先生を通じての、大宗匠と鹿児島大学医学部茶道部の係りは、昭和38年の創部以来、大宗匠がまだ若宗匠の時代以来のもので、その略歴は本誌第61巻(令和4年)12月号に述べた通りである。

大宗匠の驚嘆すべき所は、百歳になられた現在も矍鑠として、国内外で活躍されている事である。

外務省参与、ユネスコ親善大使、国連親善大使、日本国際連合協会会长、京都国際協会理事長、ロータリー日本財団理事長や、ハワイ大学、京都大学他、国内外の多数の大学等の学長、教授（特任、客員を含む）など、100以上の公職、役職を努めておられる。

また文学、哲学、人文学、文化、医学博士など、国内外の大学から、多分、20位の博士号、名誉博士号を授与されている。

更にボストンやホノルル市の名誉市民でもある。

大宗匠は、「一盃からピースフルネス」をモットーに、茶道の精神と平和の希求を、世界に発信し続けておられる（図22）。

当地鹿児島に於ては、沖縄・奄美・鹿児島の過去の因縁に対する和合の茶会を、20年以上に亘り開催され、更には鹿屋航空自衛隊に於て、先の大戦に於る戦没者に対する慰靈献茶式を行うなど、鹿児島には、特

別の愛着をもっておられる。

故・稻盛和夫氏（鹿児島大学出身）の言葉が大宗匠の御人柄を端的に示している。

「鵬雲斎様は、常に謙虚に振舞われ、文化人としての教養をひけらかすこともなく、いつも気さくに私にも話をして下さいました。そんな温かいお人柄に私は強い尊敬の念を持つようになりました。…」（「お人柄から学んだ事より」から引用）。

稻盛氏の死去に際して、大宗匠は、友を失った深い悲しみを、冊子に書かれている。

大宗匠は、国外では、2000年のミレニアム国連総会で、アナン事務総長に招かれて、平和祈念献茶式（図22）を行った他、ユネスコ本部、米国上下両院議会、ヴァチカン、ノーベル財団など、世界中で献茶・呈茶を行っておられる。

国内では、1961年の英アレクサンドル王女、62年の米ロバート・ケネディ夫妻、63年の蘭アストリック王女以来、ベルギー国王夫妻、エリザベス女王夫妻、チャールズ皇太子・ダイアナ妃夫妻……など、来日する多数の国家元首などに呈茶されている。

海外から来日した人々が、日本に期待されるものの一つが、何百年も不易の伝統的



【図22】2000年の国連ミレニアム総会での平和祈念の献茶
国連旗と「一盃からピースフルネス」

日本文化である事の証であろう。

大宗匠は、茶道文化の普及と世界平和を呼びかけ、海外60ヶ国以上を300回以上訪れており、裏千家の海外拠点は、34ヶ国、107ヶ所と言う。日本の伝統文化を広く海外に紹介する、その功績は日本にとっても計り知れない。

折しも、芸術、文化の継承・発展の施策を担う文化庁が本年5月に、一極集中の東京から京都に移転し、行務を開始した。

茶道は、スポーツなどのように、勝敗や技術を競い、リアルタイムに観客を興奮、熱狂、感動させるものではない。むしろ、その対極にある「和敬清寂」を希求するもので、争いとは無関係の世界である。

他国との戦争に明け暮れて進んできた外国の歴史は、現在頂点に達し、地球をも破壊しかねない状況に直面している、と言つても過言ではない。

理想論と言えばそれまでだが、現在、世界そして人類が最も必要なものの一つが、茶道の精神であろう。

大宗匠は、紫綬、藍綬、勲二等、文化功労、文化勲章等を受章され、世界各国からも多数受章されている。私は大宗匠ほどスケールの大きい人を知らないし、今後、日本にこのような人物が出てくるとは思われない。

文化庁、日本政府は、京都移転を機に国民栄誉賞に大宗匠を推薦し、世界に誇る日本の伝統文化を見直す事を期待する。更にはノーベル平和賞の受章を祈念している。

【5】鵬雲斎玄室大宗匠との一刻 沖縄・奄美大島・鹿児島交流茶会

平成11年より「新たな時代を拓き、今次大戦で戦没された方々に平和を誓い、友好の和が深まること」を目的に、交流茶会が開催してきた。3年に1回、鹿児島で大宗匠の和合の茶、講演を拝見、拝聴する機会があり、その後、大宗匠を囲む交流懇親

会がある。懇親会では大宗匠の御人柄が、よく現われている。



【図 23】沖縄・奄美・鹿児島交流茶会

上：「……お話を途中で申し訳ありませんが、茶道部のキャプテンが来ているので、激励していただけませんか」「どこに居るの」「後ろに立っています……」

中：ここで記念写真をパチリ

下：大宗匠、立ち上って「君がキャプテンか、頑張りなさいよ」「ハイ」と堅い握手。優しい眼差しの中にも、お茶の話となると、鋭い眼光も感じられる。

大宗匠は、皆に優しい心使いをして下さる。私達の話を最後までよく聞かれ、きちんと対応して下さる（図 23, 24）。

相手に合わせて、御自身から臨機応変に、話のきっかけを作つて下さる。「あなたには悪いが、私は医学博士なんだよ……。」全く頭が下る思いである。

万人の上に立つ人の、差別感の無い心のゆとりと、深い抱擁を感じる（図 25）。

いつも中村宗照先生が御存命ならと思う。



【図 24】沖縄・奄美・鹿児島交流茶会（つづき）

上：ここで記念写真をパチリ

下：「社中の皆さん一緒によろしいですか」「それなら連れて来なさい」

皆、大喜び。記念写真をパチリ。

大宗匠は、あくまで優しく、周囲に次々と集まつくる人を和ませて下さる。

大変お疲れなのに。



【図 25】沖縄・奄美・鹿児島交流茶会

[6] 大宗匠より下賜された、 一行書や色紙など

「掛物ほど第一の道具ハなし、客亭主共ニ茶の湯三昧の一心得道の物也、墨跡を第一とす」 南方録の中の利休居士が述べたと言われる言葉である。

数多い茶道具の中で、最も重きをなすのは、釜や茶碗ではなく、修業、徳を積んだ禪の高僧（臨済宗）の書であり、茶道の伝統を今日まで伝えてきた、家元の筆になる禪語（茶禪一味）である。

従って茶室で本当に頭を下げるのは、床の掛け物という事になる。

私達の指導者、中村社中の中村宗照先生の熱意ある指導、医学部茶道部の努力に対し、更には私共に、大宗匠より掛け物が下賜された。それは私達にとって宝であり、誇りでもある。供覧し記録とする。

図 26, 27, 28 がそれである。



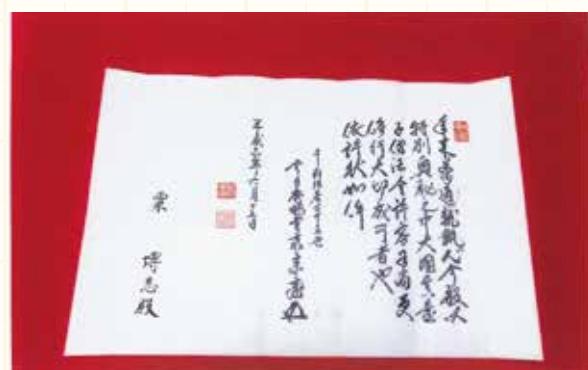
【図 26】掛け物



【図 27】掛け物、上中央が中村宗照先生



【図 28】掛け物



【図 29】第 15 代鵬雲斎家元よりの許状

図 26 は江口先生、図 27 の中央が中村宗照先生、図 28 は、中村宗照先生の手足となり、10 数年間に亘り、先生を補佐し、医学部と本学茶道部を指導し、先生の亡き後、浜畑宗雅先生と共に、医学部茶道部を指導してきた小牧宗代先生。

なお私が、特別奥秘之中大円真台子伝法の許状を第 15 代鵬雲斎宗室家元に頂いたのは、平成 14 年 6 月 15 日である（図 29）。中村先生と出合って、30 年以上が経過していた（中村先生は既に死去させていた）。

鵬雲斎家元は、間もなく代を譲られ、「宗博」の茶名を下さったのは、第 16 代坐忘斎家元である。
(つづく)